

## M. ブーバーの人間観と教育観 (VI)

—— 人間の「現実」と教育 ——

原 弘 巳

(教 育 史)

(平成9年9月30日)

### Martin Bubers Anschauung über den Menschen und die Erziehung (VI) :

—— “Wirklichkeit” des Menschen und Erziehung ——

Hiromi HARA

#### 1 はじめに

これまで、ブーバーに関する考察 (I) では、〈我-汝〉関係が何故問われるかという問題をめぐって『我と汝』成立以前のブーバーに注目し<sup>(1)</sup>、考察 (II) では、〈我-汝〉関係の構造について『我と汝』成立期のブーバーに焦点づけて明らかにし<sup>(2)</sup>、考察 (III) では、『我と汝』成立以後のブーバーに目を向けつつ、〈我-汝〉関係を人間本性にさかのぼって問うた<sup>(3)</sup>。以上の考察をもとに考察 (IV) では、教育における〈我-汝〉関係の意義をたちいって問うた<sup>(4)</sup>。そして考察 (V) では、(I) ~ (IV) の考察において課題として残した〈我-汝〉関係の宗教的基盤について「ヘブライ的ヒューマニズム」という点から問いを試みを行った<sup>(5)</sup>。わけてもこの考察 (V) において、〈我-汝〉関係が各人の置かれたそのつどの「現実」から問われるほかないことを見たが、本稿ではこうした「現実」についてたちいって問いを進めたい。

ブーバーは再三再四「現実, Wirklichkeit」に言及している。したがってまたそうした叙述を整理し、分析し、こうしてブーバーの言う「現実」とは何かを明らかにするという作業は重要であり、実際のところそうした試みも存在する<sup>(6)</sup>。ただしここではむしろ、「現実」を構成する当の人間にまず注目したい。すなわち、人間がそのつどの現実をいかに引き受けるかという問題に目を向けることから、翻って、そうした現実とは何かを問い、そこから再び、人間がいかにそうした現実を引き受けていくか、という問いの方向を取りたい。言うまでもなくそこでは、人間がそのつどの現実をいかに改善していくかという点が中心問題になるであろう。

ところでブーバーは「現実」とは何かについて或る場合には端的に述べたり、或る場合には

説明的に述べたりする。ここではそうした叙述に目を向けるだけでなく、むしろ、たとえ「現実」という言葉が使用されていないにせよ、人間とそのつどの現実に関するブーバーの挙げる多くの具体例とハシディズムにかかわる発言にとくに注目したい。というのも、まさにそこに人間がいかに「現実」を引き受けるべきかが如実にあらわれているからである。しかもそこには、前稿でもいまだ課題として残したように、「現実」がブーバー固有の宗教的なレベルで問題にされている。それゆえに以下、ブーバーの挙げる具体例やハシディズムにかかわる発言にとりわけ焦点づけて、「現実」の只中であってこれを人間がいかに引き受けるか、またそうした「現実」とはいったい何かを問い進めてみたい。

## 2 他者の「現実」と自己

人間の「現実」は、極端な捉え方をすれば、各人の「自己愛 (Selbstliebe)」と「自己愛」が織りあわさってできたものであるとされる場合もあろう。こうした捉え方においては、人間において「自己愛」と「自己愛」が第一次的なものであり、その衝突を乗り越えるために、他者への思いやりや愛が第二次的に出現すると考えられがちである。つまりそこには、人間において自己の自己へのかかわりがまず最初にあり、次に他者へのかかわりが現れるという発想が見られる。ブーバーはしかし、そうした「自己愛」が第一次的なものではなく、他者とのかかわり、あるいは他者との関係こそ第一次的なものであると見る。もし「現実」が各人の自己愛が織りあわさっているだけのものであるなら、そうした現実はいわゆる他者との関係がいわばゆがんだ仕方できあがったものであると考えるほかない。各人における諸力は本来、すべて外へと向いており、そうした諸力が自己のうちにとどまる時、その状態が「自己愛」の状態である。別言すれば、「自己愛」は、外へと向かう諸力が内へといわば曲げ戻されてしまった状態にほかならない。ブーバーは隣人愛に関する議論の中で、「自分自身のように（自分自身を愛するように）」という言葉の解釈にかかわって次のように言う。「こう訳されている言葉（『自分自身のように』という言葉、筆者注）は、あたかもひとが他者を自分自身を愛するのと同じぐらいに愛するかのようだとか、自分自身を愛するのと同じようなやり方で他者を愛するかのようだとかという、愛する程度や愛する仕方と関係しているのではない<sup>(7)</sup>。では「自分自身のように」とはどういうことか。続けてブーバーは言う。「この言葉が意味するのはあなたにとってと同じようにということであり、その内実は、愛する時にあなた自身にとってあてはまるかのようにふるまいなさい、ということである<sup>(8)</sup>。さらにブーバーは続ける。「つまりここで問題なのは或るふるまい (Verhalten) であって、感情なのではない<sup>(9)</sup>。すなわち、愛する程度や仕方が問題になる時、多くの場合感情的なものが全面に押し出されやすい。しかし、他者への愛においては感情的なものがどうであるかよりも、いわば端的に他者を愛そうとするかどうかの問題であり、その愛が結果として、まるで自分に向けられているかのようになるだけである。つまり他者を愛そうとする時、それは同時に自己を愛そうとすることでもあり、そうした努力は感情的なものに依拠するわけではなく、そのつとただ何らかのふるまいとして姿を見せるだけである。それゆえにここでは、まずはじめに「自己愛」がある、という発想は成り立たなくなる。ブーバーは補足的にこう述べている。「自己愛の概念は旧約にはまったく出てこない<sup>(10)</sup>。人間の現実の出発点は「自己愛」ではなく、他者と共にあることである。他者と共にある時人間はまず、できるだけ他者を理解しようとするが、この理解はすでに他者にお

る「現実」の理解となる。端的に他者を愛そうとすることが「ふるまい」、あるいは「行動」として現れるほかないとすれば、当然また他者理解も、他者の現実の理解へと向かうからである。その場合人間は、自己の狭い理解の仕方や一面的な行動様式にとどまることはできない。だがそれでもなお人間は、何らかの仕方では自己自身のうちにとどまろうとしがちになる。この点についてブーバーは、ラビが出会った或る体験を挙げている。

『ゴグとマゴグ』のなかでブーバーは、この書の主役であるヤーコブ・イツハクが若い頃の痛烈な体験を語っている逸話を取りあげる。それによれば、或る時、ヤーコブ・イツハクがその滞在場所で、部屋の窓から見える勤勉そうな鍛冶屋に対抗意識を抱き、朝早くから勉強することで鍛冶屋に負けまいとした。ところが鍛冶屋はイツハクよりもっと早く起きて仕事をしてきた。「向こうでは槌を打つ作業がすでに真っ只中であり、火花が路地まで飛び散っていました。そこで私はもっと早起きしました。が、何の効果もありませんでした。『あの男の手仕事に対して恥じ入ることはできない。私にとって問題なのは永遠の生なのだ』と私は自分に言い聞かせ、再び鍛冶屋よりはるか上まわろうと試みました。しかし無駄でした<sup>(11)</sup>」。そこでイツハクは鍛冶屋よりなお一層早く起きることを心がけた。一方、鍛冶屋もまたイツハクに負けまいと一層早起きした。イツハクはそれを見て、さらに鍛冶屋より早起きしたが、鍛冶屋も同じだった。ついにその堂々めぐりが限界に来た時、イツハクが鍛冶屋に直接に話に行くと、鍛冶屋自身も対抗意識を抱いてイツハクよりも早起きしようとしていたことを告げた。そこでイツハクは依然として相手より上まわろうとしてこう言った。「しかしあなたは、私にとって重要なことを理解できません<sup>(12)</sup>」。すると鍛冶屋はこう応じた。「たしかにわたしは理解できません。だが、わたしにとって重要なことを先生は一体理解できるのですか<sup>(13)</sup>」。この発言でイツハクはハッとした。イツハクはこう述懐する。「それ以来、私が他者を理解しない限り、他者が私を理解するかどうか疑うような権利は私にはないように思えてなりません<sup>(14)</sup>」。イツハクはこうして、自己を知るということが、実は他者を知るということに尽きることに気づいた。ここでは言葉の上ではたしかにイツハクは他者理解の問題として語ってはいるが、しかし明らかに、他者理解というよりも他者の「現実」の理解、すなわち、鍛冶屋が自己の職に没頭しているという現実、しかもそこに鍛冶屋が何か自分なりの意味を見つけているという現実の理解が問題になっているであろう。

もちろん、イツハクの対抗意識がイツハク自身に十分な他者の現実の理解へと駆りたてたといういきさつにすでに現れているように、他者の現実の理解としての他者理解においては、各人はさしあたり自己自身の現実に何ほどか埋没していなければならない。さもないと、他者の現実を痛切に感ずることができなくなるからである。すでに挙げた言葉で言えば、人間が「自己愛」に没頭するからこそ、他者の「自己愛」に、他者の「現実」に気づくことができる。ここでは人間は大きな抵抗に出会い、この抵抗と対峙するのであり、対峙できるためには「自己愛」への何らかの仕方の没入が実は前提になる。その時にこそ人間は他者の「他者性」に突き当たることができる。そしてこの時、人間は他者における自己愛を非難するわけにいかず、まず自己自身のうちなる問題性を体感するほかなくなるであろう。『ハンディズムの教えによる人間の道』のなかでブーバーはこう述べている。「人間は、自己と他の人々との間の葛藤状況が、自己自身の心のうちにある葛藤状況の結果にすぎないことをまず自らにおいて認識すべきである<sup>(15)</sup>」。さらにブーバーは「自分の側から始めること、ただこのことだけが問題である<sup>(16)</sup>」と述べ、すぐその後で言う。「私が、私の場において世界を動かすことができるような



うに、目下の自己の現実をそのつど疑問に付し、他者の現実気づくという在り方が必要であろう。そのためには、ここでもまた自己の現実埋没し、その空虚さに気づくことが重要である。自他の現実への問いかけの徹底性は、自己の現実への埋没の強度に比例するとさえ言えよう。ただしそれは、人間が何らかの安定感や安心感を可能な限り警戒する努力を続ける限りにおいてである。以下、この点についてさらに問うてみよう<sup>(25)</sup>。

### 3 自己の「現実」と他者

人間が自己の目下の現実にとらわれている時、何らかの安定感や安心感のうちにあり、これまでの、またこれからの現実に対して何らかの「確信」を抱いているであろう。実はこうした「確信」が他者の現実を見えなくする。この点についてブーバーはメシアとしてのイエスに関する議論の中で次のように述べている。「しかしおそらく、イエスをただ外見上人間の形態を装った神だとか、変質病者だとかとみなさない人が期待できることは、イエスは人間の自己確信 (Selbstgewißheit) を、たとえそれが最高の人間の最高の確信であったとしても、中断のない直線だとみなしてはいないということであろう。人間的であるのは、自己の本質についての人間の確信がさまざまに動揺することによってのみである<sup>(26)</sup>」。たとえここにはブーバー独特のイエス解釈がうかがえるにせよ、自己における「確信」が動揺しない限り、決して他者の現実は見えてこない。もちろんここで言う「確信」はきわめて日常的なレベルでの「確信」にもあてはまる。

ブーバーはラビ・ハノクという人の話を取り上げて一種ユーモアが混ざった逸話を語る。それによれば、昔或る愚か者が、朝、自分の服がどこにあるかをいつも捜していたので、服を一つ一つどこに脱いだかを紙に書き留めておいたという。そして朝その紙を見てうまく着ることができた時或る疑問が起こってきたという。「ところでしかし、私はいったいどこにいるのだろう。——どこに残っているというのだろう<sup>(27)</sup>」。つまりここには、すべてが調達されており、うまくものごとが運ぶはずだという確信が、すでに次の瞬間には動揺に見舞われるという悲劇が描かれており、服を着るといふきわめて日常的な現実に関する確信でさえ、とたんに何か別の次元の現実、すなわち服を着ているのは他ならぬ私であるという現実の前に崩れ去ることが意味されている。

こうした動揺に見舞われる時、言うまでもなく人間は不安に襲われる。この不安を人間は避けて通ることができない。もし不安がなければ、人間は本来の現実から遠ざかっているのかもしれない。ブーバーはカバラもまた人間の不安を希薄にする傾向を持つと捉え、ハンディズム的な在り方がそうした不安を正面から引き受けていく在り方であると説き、こう言う。「——全体としてのカバラの体系構造は、ほとんど決して中断されることのない、動揺することのない、捨て去られることのない確信によって規定されている。しかしまさに、低迷することのうちに、戸惑うことのうちに、一切の分別知の凋落に関する深い知のうちに、一切の所有された真理の現実との不一致をめぐる深い知のうちに、つまり、聖なる不確かさのうちにハンディズムの敬虔さがそれ本来の生命を持つ<sup>(28)</sup>」。この「聖なる不確かさ」と名づけられているものが人間におけるきわだった意味での不安を生み出し、その意味内容はおそらく、人間の現実において依拠しうるものはなにもなく、むしろなにもものにも依拠しない、とりわけ有限な人間に関する一切に依拠しないということから来る不安のことであろう。それゆえにここでは不安は、

「絶望」と呼ばれるものに近づく。だがこの「絶望」という究極の不安を呼び起こすものによってかえって本来の現実が感じ取られる。ブーバーは、もちろん絶望が神への回心を引き起こすという問題を念頭においてであるが、こう述べている。「絶望が人間の秘められた力の眠る地下牢を破砕するのです。根源的な深みにある泉がわき出てくるのです<sup>(29)</sup>」。この泉がわき出る時、人間は存在全体をあげて目下の現実を本来の現実にもたらしそうとすることができる。おそらくこの時人間は、自己に不安を呼び起こす現実、そして絶望を呼び起こす現実をかえって、それでもなお何らかのかたちで受け入れるほかなくなるのではないだろうか。ここでは神への回心が生じようと生じまいと、人間は再び目下の現実に取り組まざるをえないであろう。つまり、目下の現実への絶望が、目下の現実を見放すことにつながるのではなく、かえって目下の現実を受け入れるよう人間を駆りたてる。絶望を乗り越えるのは、他ならぬ目下の現実にも存在をあげてかかわることによってである。ブーバーはたとえば、「愛」についてこう述べている。「ただ人間をどんどん愛するようになる者のみが、神とのかかわりにおいて世界の神としての神にまで到達する。世界を愛さないものは、神とのかかわりにおいてただいわば孤独な神を、あるいはその人自身の魂の神を志向しているだけである<sup>(30)</sup>」。

このように他者を愛することができるのは、他者の現実についてより以上に理解しようとするからこそである。さもなければ他者を愛することはできない。この点についてブーバーは或る農夫と、もう一人の、その農夫を愛すると明言する別の農夫の会話を取りあげ、前者が後者に問いかける場面を描き出す。「『おまえがわしを愛しているとどうして言えるのか。いったいおまえはわしに何が欠けているか知っているか。』その時相手の農夫は沈黙し、沈黙しながらおたがい向かいあって座っていた。というのもそれ以上言うべきことがなかったからである。本当に愛する者は、他者と自己の同一性の深みから、他者の存在の根底から、友に何が欠けているかを知っている。そのことが初めて愛と呼ばれる<sup>(31)</sup>」。

他者の、そして周りの世界の現実について一層理解しようとする時、人間は以前にもまして自己の現実を知ることができるようになる。ところが現代において、こうした現実を受けいれたとたんすでに当の現実が姿を変えていくとすれば、本来の現実だと思われたものも瞬く間に消え失せていく。とりわけ、自他の現実を本来の現実にもたらしそうとする時、何らかの価値判断が働いているとすれば、そうした判断もまたすぐさま色あせていく。とすれば、一体、不安と絶望の底から人間は現実といかに対峙すべきなのだろうか。

#### 4 「現実」を高めること

そのつどの現実が以前にもまして瞬く間に変貌を遂げていく現在、本来の現実などありうるだろうか。たとえありえたとしても、それはやがて未来においてすぐさま過去のものになるのではないだろうか。しばしば試みられてきたように、流動するそのつどの現実の背後に、永遠に変わらない本来の現実をたとえ想定したとしても、そのような本来の現実の存在それ自体がもはや疑われざるをえない。たとえ存在したとしても、ブーバーの言う「瞬間の神、AugenblicksGod」に示唆されるように、そうした本来の現実もまた変貌していくのではないだろうか。そうであるなら、人間にとって問題なのは、ともかく目下の現実の只中において現実を一步一步改善し、改善の保証をあてにしないこと以外にないのではなかろうか。こうした改善する努力が何であるかこそ解明されるべきであろう。

ところで、目下の現実の改善に向かう時、人間はよりよいものが何であるかをさしあたり判断しなければならず、したがって当然また、何がよいか、何が悪いかを判断する基準が必要になる。つまり善悪の判断の基準が必要になる。ところが現代において、何が善で何が悪かはますます不分明になりつつある。というより、あらかじめ特定の善悪の判断基準を持ちこまないことこそ、人間の現実の改善にとって生産的となるのではなからうか。ブーバーは、人間の現実において善と呼ばれてきたものどころか、悪と呼ばれてきたものも実は人間にとって必要なものであると捉える。ブーバーは禁欲や苦行や断食について否定的に述べた箇所でこう言う。「ひとは悪しき衝動、すなわち、みずからのうちなる情念を抹殺すべきではなく、悪しき衝動とともに神に仕えるべきである。悪しき衝動は人間からその方向を受け取るべき力である<sup>(32)</sup>」。さらに、パール・シェム・トブを念頭に置いてブーバーは、悪をいばらのやぶにたとえ、善を火にたとえて、善と悪のお互いがお互いを必要とするという点を際立たせ、こう述べている。「——悪と善は二つの異なった性質のもののようにもはやお互いに分けられるのではなく、形成されていない素材と形成された素材のように分けられるのであり、右と左のようにではなく、下と上のように、いばらのやぶと火のように分けられるのである。いばらのやぶを火によってすべて燃やすのは人間である。誘惑の欲念そのものを神と結びつけるのは人間にかかっている<sup>(33)</sup>」。ここでは、一見したところブーバーは、善と悪を実体的な何かとして措定しているような印象を与えるが、しかし「いばらのやぶ」と「火」という比喩からもうかがえるように、たしかにブーバーは善悪の区別を認めてはいるものの、その内容を可変的なものとして捉えていることは言うまでもないであろう。

善悪に対するこうした発想は精神分析における「昇華」の概念を思い起こさせるであろう。しかしブーバーは、この「昇華」という発想はハンディズムの見解を歪めたものであると捉え、本来のハンディズムの見解についてこう述べる。「今日の精神分析はハンディズムのものの見方をリビドーの昇華という理論形式において再び取りあげている。それによれば、人はさまざまな刺激を当のその直接の対象からそらし、そしてそうした刺激を精神の領域に移すこと、つまりいわばそのエネルギー形態を変えることができる」とされる。ここでは一切がただ心的事象にのみ限定されている。それに対してハンディズムは他の実在との事実的な接触を繰り返し教える。昇華は人間の内面において起こるが、火花を高めることは人間と世界との間で起こる<sup>(34)</sup>」。ブーバーの議論をここで簡略化して言うなら、善悪の問題は、かかわる対象から受けとめる何かを個人の内面においてどう対処するかという問題に帰着するわけではなく、各人とまわりの世界との間で実際に何が起きているかという問題に収斂する。この点についてブーバーは、再びパール・シェム・トブを念頭に置いて、泥棒に忍び込まれた二つの家の家人の態度を比較する。その際、一方の家の人には悲鳴を上げ、どろぼうは逃げ、こうして結局何事もなかったかのような結果に終わる。他方の家の人には、どろぼうにそのまま忍び込ませておいて機を見てうまく捕まえる。人間のこうした二種類の対処の仕方について、擬人法を用いてこう言われている。「最初の人間は悪を追い払うことになり、もう一人の人間は悪を善に変える。そして後者には次の格言が当てはまる。『誰が英雄か。それは衝動を制圧する人間である』。彼は悪の衝動を強制してそれにみずから（が何であるか、筆者注）を教え、こうして悪しき衝動が彼から学ぶのである<sup>(35)</sup>」。この例から推察されるように——この例ではすでに善悪の基準は自明の前提とされているものの——、善悪は、人間と人間とのいわばぶつかりあいにおいて、そして善悪のどちらも人間にとって何らかの意味を持つものとして問われることによってこそ、

人間にとって生産的になりうると考えるべきであろう。このことは他の人間とのかかわりにおいてのみならず、人間と周りの世界一般とのかかわりにおいても言える。総じて、悪なるものは、たとえば制度的なもの等々にもはびこっており、そうした悪なるものが改善されていくかぎり、それなりの何らかの存在理由をさしあたりは持つ。ブーバーは善を聖なるもの、悪を聖ならざるものと言い換えて、イツハクにこう言わせている。「我々はまじりけのない聖なるものが住まう国に遣わされているのではなく、聖ならざるものへ遣わされている。聖ならざるものを培って聖ならざるものに救いがあるように——<sup>(36)</sup>」。善悪にせよ、聖なるものと聖ならざるものにせよ、どちらも人間にとってそれなりに必要であり、問題なのは、人間が悪なるものや聖ならざるものにどう立ち向かうかであり、その立ち向かい方に人間の現実がかかっている。以下、どう立ち向かうかに関するブーバーの叙述にさらに目を向けなければならない。

善悪がどちらも必要なものとして同時に問題になるとすれば、人間は何らかのあらかじめの基準にできるだけとらわれずに、かかわる相手のなかへいわば飛び込んでいかなければならない。目下の現実を高めようとする努力において、もはや人間は特定の観念等々に拘泥することはできない。拘泥する場合に現れる態度は多くの場合、一種の「高慢さ」であろう。ブーバーは自己自身の人生を振り返って、青年時代に理性や知性にのみこだわり、人間の現実がかえって見えなくなったことを省み、「理性を授けられた人間の高みから<sup>(37)</sup>」しかものごとが見えなくなっていたことを振り返って、こう言う。「私はもはやハンディームの生活について何をも見なかった。たとえ私がそのすぐそばを通り過ぎたとしてもである。なぜなら、私は見ようとしなかったからである<sup>(38)</sup>」。ブーバーはさらに、距離を置いて人間の現実を視めて自己満足に耽っていたことを反省し、ブーバーを取り巻く現実の基盤となっているユダヤの民族性との連関でこう言う。「精神的な探究にとらわれ、知力によって空中へ連れ去られた若者ほど、民族性との救済的な結びつきを必要とするものはない<sup>(39)</sup>」。言うまでもなくこうした高慢さもまた人間にとって何ほどか必要である。さもなければ、人間は本来の現実を強く求めることができなくなるであろう。ただし本来の現実に気づくためには、「謙虚さ」が必要である。この「謙虚さ」とは何かは『ゴグとマゴグ』の次の逸話に現れている。すなわち、ラビ・アスリエルという人が、イツハクの周りに人々が数多く集まる一方、自分のところには、自己がイツハクよりはるかに偉大な人物であるはずだと自負できるのに、あまり人々が寄りつかないのはなぜか、という質問をイツハクに投げかけた。それにたいしてイツハクはこう答えた。「博識が山にも比較されるようなあなたのもとに神の言葉を求めに来ないで、私自身も認めるほどの取るに足らない価値しか持たないような人間（である私、筆者注）のもとに、多くの人々が神の言葉を聞くために近寄って来るのは私にも驚きです。しかし、人々が私のところに来ることを私が驚いているから人々が来るのであり、人々が来ないことをあなたが驚いているから人々があなたのもとへ来ないという事情なのかもしれません<sup>(40)</sup>」。あるいは、有名になることが実は人間を高慢にしまうからこそ、それがひとつの罪として人間にのしかかりもするという点をブーバーはきわだたせ、イツハクにこう言わせている。「この名声とは何というみじめな代物だろう。メスリッチェの聖なるマギドが世の中に知られるようになった時、どのような罪を犯したかどで自分が負い目を負うようになったかを自分に告げて下さるよう神に願ったが、私はその気持ちが何とよくわかることだろう<sup>(41)</sup>」。ブーバーは明言こそしないが、ここでもまた、何らかの高慢さが人間のうちに生じていてこそ謙虚さが生まれると捉えている。ただし謙虚さこそ高慢さをよりよいものとするとは言うまでもない。ブーバーは高慢なコラの魂と謙虚なモー



セの魂とを比べ、こう述べている。「高慢さ (Hochmut) が謙虚さ (Demut) に屈する時ようやく高慢さは救われる。そして高慢さが救われる時はじめて、世界が救われることができる<sup>(42)</sup>」。もし人間が謙虚であるとすれば、とりわけ他者を導く立場にある場合、プーバーがここで「世界が救われることができる」と述べるように、他者における問題は実は自己自身の問題でもあると考えざるをえなくなるであろう。プーバーはイツハクに、再びモーセについてこう述べさせている。「枝は根から養分を吸い取るというのが道理ですが、もし枝が枯れるとすれば、根もまたいたんでいてと予想できます。そこでモーセは、人々が誤った道を歩んでいるのを見ると、よく自分にこう言い聞かせたものでした。『あれは私に問題があるにちがいない。人々が再びよくなるためには私が回心しなければならぬ』。モーセというきわめて謙虚な人は、いわばすべての人の下に自分を置き、自らの回心をとおして人々を神のもとに連れ戻したのです<sup>(43)</sup>」。さらにプーバーは或るラビが他者の罪が自分の罪であるといつも感じていたという例を挙げ、こう述べている。「——彼は他者のすべての罪を自分自身の罪であると認め、その罪のために自分自身を非難した<sup>(44)</sup>」。こうしたラビの境地に普通の人間が達しうるかどうかは別にして、「謙虚さ」はおそらく、ただ自己の内面の問題として考えられている限り決して培われず、周りの世界の現実が実は自己自身の現実でもあることを実感する限りにおいて徐々に形成されていくのではないだろうか<sup>(45)</sup>。

謙虚である時にはじめて人間には目下の現実が一層はっきりと見えてくるのであり、だからこそ人間は本来の現実を作り出そうとする。プーバーは善悪の問題との連関において再びイツハクを念頭に置いて言う。「みずからが悪しき存在であることを隠さない悪人のことで苦情を訴える人間がいると、彼はよくこう言った。すなわち、自分が正しいということを知っている義人よりも、自分が悪いということを知っている悪人のほうを私は愛する、と<sup>(46)</sup>」。人間はどこまでも自己を正当化してはならず、謙虚に自己を見つめない限り、たちまちのうちに目下の現実を歪曲してしまう。プーバーはおそらく、謙虚な人間の最たるものとしてイエスを念頭に置いていると考えられ、実際、イエスが「善き師よ」と呼びかけられた時、それに答えるイエスの言葉を次のように解釈する。「他のすべてのものごとにおけると同じように、ここにおいてもまた神だけが善いのであり、神だけが善き師であり、神だけが永遠の生への問いに対して正しい答を与える——中略——こうしてイエスは自らが、善き師の教えようとする意志にとって有用な教える媒介者であることを知っているが、しかし彼自身は善いと呼ばれようとはしない。神以外の誰も善きものはいない<sup>(47)</sup>」。このような謙虚さによって人間は、目下の現実に対していわば一步退くことになるのではなく、むしろかえって、目下の現実に積極的に働きかけていかざるをえなくなる。プーバーはこの点についてハシディズムの伝承を取り上げ、こう述べている。「ハシディズムの伝承が賞賛する単純な者は、わずかばかりの自己（についての、筆者注）感情をも持たない。もし彼が選ばれた者だとだれかに言われたなら、彼はからかわれていると思うだろう。彼はまた決断する必要がない。その理由はまさに、善きにつけ悪きにつけよくよすることなく、彼が自らの生を生きているからであり、世界をあるがままに受けいれ、あたかも永遠の昔から彼がそれを知っているかのように彼に信託されている善きことを、機会が与えられた時迷うことなき心でなすからである——<sup>(48)</sup>」。

## 5 応答すること

謙虚であれば人間は、そのつどの現実に対して率直に応答せざるをえなくなるはずである。事実、すでに挙げた娘の結婚について相談されたブーバーの体験の例においても、ブーバーは他者が応答を求めているという現実に関心を感じなかったどころか、応答することもできなかったが、その理由は、ブーバーがいつのまにか謙虚さをなくし、他者の現実に応答するという「責任」から逃避していたと見ることもできる。この点についてブーバーは「おまえはどこにいるのか」という神からの問いかけに対して身を隠したアダムを念頭に置いて、人間一般について次のように言う。「生きられる生に対する責任から逃れるために、現存在はひとつの隠蔽装置にまで仕立てられる<sup>(49)</sup>」。人間が本来、周りの世界に応答したいと思うということ、このことは、周りの世界の側から見れば、周りの世界が各人の応答を待っているということの意味するとも言える。目下の現実には各人のそのつどの応答があってはじめてよりよくなりうる。この点についてブーバーは、イツハクと少し年上のイェシヤヤとの若い頃の会話を取り上げている。イェシヤヤが人間の応答する力の無力さを述べたことに対して、イツハクはこう応じる。「ひょっとしたら世界の救いは実際我々にかかっているのではないだろうか——<sup>(50)</sup>」。もちろん「世界の救い」と言っても、人間の行為は大げさなものでもなく、呪術めいたものでもない。むしろ目立たない行為でさえあろう。つまり謙虚さから来る行為は目立たないが、しかし周りの世界に対してかえって大きな力を及ぼしうるのではないだろうか。「我々が救いを引き起こそうとするとき、我々は救いをすでに失っている。しかしおそらく我々は、まさに何をも引き起こそうとしない時、何か作用を及ぼすであろう<sup>(51)</sup>」。

もし人間が謙虚に目下の現実に応答するとすれば、そうした応答において発せられる言葉は何か技巧的なものでなく、自然なものになる。したがってまた、他者が応答を期待する時も、無理なく自然に応答できるはずであり、繰り返し取り上げた、応答を期待する農夫の例においても、ブーバー自身が何か逡巡したあげく、自然に応答できなかったことがはっきりと示されている。この点についてブーバーの挙げる逸話にここでも注目してみよう。すなわち、或る教養ある人が、美しく話すツァディークに、教えの美しい言葉を請うた。ところが、ツァディークはこう答えた。「美しく話す前に、私は唾になれたら！<sup>(52)</sup>」。ここでは、言葉の美しさが問題ではなく、言葉を発する人間の人間性こそ問われている。美しい言葉は単なる技巧から成り立っているかもしれない、歪んだ人間性を隠すものかもしれない。そして人間の現実に関与する力も及ぼさない場合も多い。むしろ沈黙がかえって人間の現実を変革することになるかもしれない。「言葉においても何気なさという要素が決定的である<sup>(53)</sup>」。このような「何気なさ」は、あらゆる既成の判断基準や評価基準に拘泥せずに関与することによって生まれてくる。ブーバーはラビ・ブーナムにこう述懐させている。「——私は人々と単純に交わらず、ただそのように交わって初めて人々のことを知るのに、知ることもできず、しばしば人々を観察するだけでした。——中略——私は自由な心を持って、何の意図もなく人々と交わるべきでした<sup>(54)</sup>」。もしこのような心を持つならば、言葉を発する相手であるありのままの人間にまず向かいあわなければならなくなる。言葉は人間が自己自身を表現する、重要ではあるがひとつの手段にすぎない。そうであれば人間は、あくまで言葉を頼りにせざるをえないにもかかわらず、言葉をたんなるひとつの手がかりとして、相手と向かいあわなければならない。ブーバーはイツハクと語り合うイサハル・ベールという人物にこう言わせている。「すべて根源的な話は、

言葉と挙動とがおたがいにその根の繊維となって出会っているようなところで把握されるべきです<sup>(55)</sup>」。

人間がこのように何気なく、自然に周りの世界にかかわることができるためには、人間はそのつどの現実を何か与えられたものとしてそのまま受けとめなければならない。すなわち、現実を一種の運命として受けとめることができなければならない。この点についてブーバーはヤーコブ・イツハクの物語る話を取りあげる。すなわち、イツハクが歩いていると、或る農夫の荷車が横転している場面に出くわしたという。その時イツハクは手伝っても無理だと思ったが、農夫は、イツハクは当然車を元通りにする力をもちあわせているはずだと信じていた。実際、車は二人で協力して元通りになった。イツハクは農夫の信念を不思議に思い、農夫に繰り返し尋ねると、農夫はこう答えた。「ああ、兄弟、あんたは何てしつこい男なんだろう。まあいい、わしがそう信じたのは、誰かがあんたをわしが行く道に送り込んだのだろうと思ったからだ。<sup>(56)</sup>」さらにイツハクはこう尋ねた。「するとあなたの車が倒れたのは、私があなたの車を助けることができるようにということなのですか<sup>(57)</sup>」。「そうでなくて何だね、兄弟<sup>(58)</sup>」と農夫は答えた。

現実をこうした所与の運命として受け入れることができるためには、上に挙げた農夫においてそうであるように、どのような障害に出くわしても、何とかするという信念を持たなければならない。この信念は、別の言葉で言えば、きっと救われる、というより、いつでも救われているという信念であると言えよう。ブーバーは、未来においては救われるという終末論的発想が、目下の現実をないがしろにする発想にほかならないと捉える。たとえばこんな発言がある。「——創造ははじめにおいてただ一回きりのものだけであるばかりでなく全時代にいつでもあるように、救いも終わりにただ一回きりのものだけでなく、全時代にいつでもある<sup>(59)</sup>」。さらにこう言われている。「——新しいタイプのハシディスト（単純な者、筆者注）は、重大な結果を生む終末の切迫に対して（それでもなお、筆者注）何のかかわりをも持とうとせず、所与の生の瞬間に諸力をあげて神に仕えようとする——<sup>(60)</sup>」。そして旧約を念頭に置いてブーバーは言う「許しは終末論的ではなく、永遠に現在的である<sup>(61)</sup>」。このことは、メシアの到来をひたすら早めようとする人々に対する警告でもある。『ゴグとマゴグ』のなかでブーバーは、当時のナポレオンのヨーロッパ支配をむしろ終末の到来として喜んで迎えていた人々を批判的に捉える。といっても、人々はナポレオンが勢力を伸ばしても自分たちの生活は同じであり、終末はいまだ来ず、自分たちも救われていないことに失望していた。加えて、ナポレオンの失脚が終末はいまだ来ていないことの確証でもあったがゆえに、一層人々は失望していた。ブーバーはこうした人々に対して、イツハクにしばしば非難を込めて語らせている。むしろ人間がそのつどの現在を精一杯生きる時にこそ、おのずからメシアがやって来ると考えなければならず、おそらくは、たとえメシアがやって来たとしても、人間は同じくそのつどの現在をただ精一杯生きるしかないであろう。「何世代にもわたってメシアを到来させようとそれぞれに骨折られてきました。そしてそれは成功していません。人がメシアにかかざらわれない時メシアは到来するように私には思われます<sup>(62)</sup>」。さらにブーバーは別の箇所でもラビ・メンデルに次のように語らせている。「私たちはメシアの気配について何を知っていきましょう。いつメシアが来るか、何を知っていきましょう。おそらく、誰もはやメシアに呼びかけず、誰もメシアを期待しない時にメシアは来るでしょう。普段と変わらぬ或る日に。いたるところでユダヤ人たちがその日々の営みの関心事に没頭しながら頭を悩ませて走り回り、誰も次の瞬間以外のことなど何も考

えない時に。そうそう、その時に！<sup>(63)</sup>。つまりここでもまたブーバーは、ゴグという終末をもたらすとされる者——ここではナポレオン——にたえず拘泥するのは、結局人間が目下の現実存在全体をあげてかかわらないからであると見る。ブーバーは、マギドをしてイツハクに、年老いて衰えたイツハクの心の中に決定的な問題がまだ潜むと語りかけさせ、マギドにこう言わせる。「今は亡きあなたの弟子があなたの食卓であなたにこう問いかけました。このゴグとは何者なのか、このゴグが心の内部に存在するからこそ、外部にも存在することになるのではないか、と。たしかにゴグは心の内部にいます<sup>(64)</sup>。もしメシアが到来するとしても、その到来を早めることなどできない。メシアの来る時は人間にはやはり予測不可能であり、もし万一人間の力がいわば天にまで届くとすれば、メシアの到来を遅らせることをただ避けるといふことだけが残されているかもしれず、それさえ保証はできない。各人は目下の現実存在全体をあげてかかわる以外にない。その時にこそ、何らかの意味でたえず新たなものが生まれ、こうして人間の現実が徐々に変容し、この変容がひょっとしたらメシアの到来と関係するといふだけかもしれない。「それぞれの人間は世界において或る新たなものです。そして彼は自らの特質をこの世界において完全なものにしなければなりません。というのも、たしかに、こうしたことが生起しないということが、メシアの到来を遅らせることになるからです<sup>(65)</sup>」。

「自らの特質を完全なものに」するという努力、この努力こそ、人間に大きな充実感をもたらすと同時に、目下の現実をよりよい現実にする努力でもあろう。しかもこの努力がそのまま、他者の特質を完全なものにする努力ともなろう。このように自他共々により以上のものを求めるからこそ人間は、どのようなことがあっても、それなりに快活に行動することができる。ブーバーは人間のこの快活さをとりわけ強調する。言うまでもなくその理由は、快活こそ人間の現実をよりよい方向へもたらすからである。たとえば、イツハクがかなりの悪人をそれでもなお受け入れ、人々はそれをいぶかしく思っていたが、それについてラビはこう語った。「私は喜びを愛し、暗い気分を憎みます。そしてこの男は大変な悪人です。罪ある行為を犯した後、やがてすぐ再び愚行にふけるにしてもほかの人間なら、たとえそれがほんの少しの間であっても、後悔するのが常だが、この男は憂鬱になるのを嫌がって後悔しない。そしてこの浮いた気分が私を引きつけるのです<sup>(66)</sup>」。さらにブーバーはイツハクの弟子ナフタリが、自分たちの集まりについて次のように語る言葉を引用する。「この集まりにおいては人は徹底して学び、徹底して酒を飲み、どちらの場合でも同じく快活 (fröhlich) です<sup>(67)</sup>」。

## 6 おわりに

結論として言えば、人間の現実がよりよくなるためには、各人が快活であること、このことが最も基本的な前提になる。こうした快活さこそ、謙虚さ等々の現実改善の努力のすべてをいわば支えることになろう。言うまでもなく、こうした努力はとりわけ他者を導く者にとって必要であり、その意味でそれは、教育する当の人間の努力であると見ることができる。そうであれば、こうした努力の内実をさらに問い進めることによって、教育者とは何かという問題があらためて問われることともなる。ただしそのためには、ブーバーその人の思想をさらに問う必要がある。さらにそのためには、ブーバーとハンディズムの問題は言うまでもなく、この問題との連関において、ブーバーの生きざまに、ブーバーの生涯に直接に触れるほかないのではなからうか。というより、まずブーバーという一人の人間の生涯にとりわけ焦点づけて、ハンデ

イズムを、ブーバーの書き残したものの全体を、そしてそこから教育を再理解しなければならないであろう。

註

- (1) 「M. ブーバーの人間観と教育観 (I) —— 〈我-汝〉の成立——」, 愛媛大学教育学部教育学研究室教育学論集第14号, 1996年2月, 10頁-26頁.
- (2) 「M. ブーバーの人間観と教育観 (II) —— 〈我-汝〉の展開——」, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部教育科学, 第42巻第2号, 1996年2月, 19頁-37頁.
- (3) 「M. ブーバーの人間観と教育観 (III) —— 〈我-汝〉の人間学的基盤——」, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部教育科学, 第43巻第1号, 1996年9月, 25頁-43頁.
- (4) 「M. ブーバーの人間観と教育観 (IV) —— 『相互性』と教育——」, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部教育科学, 第43巻第1号, 1996年9月, 45頁-60頁.
- (5) 「M. ブーバーの人間観と教育観 (V) —— ヘブライ的ヒューマニズム——」, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部教育科学, 第43巻第2号, 1997年2月, 39頁-62頁.
- (6) たとえばグリュンフェルトは、ブーバーの言う「現実」を、「出会い」との連関において、隣接する諸問題を含めて包括的に検討し、たちいって構造化している (Werner Grünfeld, *Der Begegnungscharakter der Wirklichkeit in Philosophie und Pädagogik* Martin Bubers, Ratingen 1965). いずれにせよ一連のこうしたブーバー研究については後にあらためて議論したい.
- (7) M. Buber, *Zwei Glaubensweisen*, 1950. in ; *Sämtliche Werke*, Bd. I. *Schriften zur Philosophie*, Heidelberg, 1962, S.701.
- (8) a.a.O.S.701.
- (9) a.a.O.S.701.
- (10) a.a.O.S.701.
- (11) M. Buber, *Gog und Magog*, 1943, in ; *Sämtliche Werke*, Bd. III. *Schriften zum Chassidismus*, 1963, S.1024. 本書においてイツハクはしばしば「イェフディー」という呼び名で登場する. この名はヘブライ語で「ユダヤ人」という意味であり, 本書ではそれなりの何らかの意味あいが含まれているが, 本論では便宜上すべて「イツハク」にした.
- (12) a.a.O.S.1025.
- (13) a.a.O.S.1025.
- (14) a.a.O.S.1025.
- (15) M. Buber, *Der Weg des Menschen nach der chassidischen Lehre*, 1948, in ; *Sämtliche Werke*, Bd. III. S.728.
- (16) a.a.O.S.729.
- (17) a.a.O.S.729.
- (18) a.a.O.S.729.
- (19) a.a.O.S.731.
- (20) a.a.O.S.731.
- (21) M. Buber, *Mein Weg zum Chassidismus*, 1917. in ; *Sämtliche Werke*, Bd. III. S.971.
- (22) a.a.O.S.971.
- (23) a.a.O.S.972.
- (24) a.a.O.S.972.
- (25) 蛇足ながら, 人間の安定感や安心感はただ各人の内面の問題に帰着するわけではなく, 人間と周りの世界の関係に由来し, したがってまたそうした関係の改善の問題として捉えられなければならない. もし安定感や安心感が背後に退き, 孤独や不安が高まれば, 人間は一層強く関係の改善に向かわざるをえず, こうして最終的には, 有限な人間を越えた何か大きなものに向かいあうはかなくなるかもしれない. ブーバーはこうした向かいあいを遮断してしまった一人としてスピノザを取り上げる. それによればスピノザは,

神からその「人格性」を剥奪し、こうして人間が向かいあうのはきわめてつかみどころのない漠然とした何かにすぎなくなり、人間はもはや人格としての神と向かいあわなくなった。それどころか人間は自己自身とのみ向かいあうようになった。だが本来人間は自己自身と向かいあうことはできない。たとえばこう言われている。「独話的な生へと向かう西洋精神の傾向がスピノザによって促進された——」(M. Buber, Die chassidische Botschaft, 1952. in ; Sämtliche Werke, Bd, III, S.744). たしかに我々はそのつど人格として、人格としての神に向かいあえるかどうかは恩寵であるにせよ、他の人間人格に向かいあおうと努力しない限り、茫漠たる無のなかで生きることになるであろう。

- (26) M. Buber, Zwei Glaubensweisen, a.a.O.S.671.
- (27) M. Buber, Der Weg des Menschen nach der chassidischen Lehre, S.730.
- (28) M. Buber, Die chassidische Botschaft, S.847.
- (29) M. Buber, Gog und Magog, a.a.O.S.1096.
- (30) M. Buber, Die chassidische Botshaft, a.a.O.S.869. 人間への愛が神への愛の前提になるというブーバーの捉え方は旧約の解釈に基いてもいる。詳細については省略するが、ブーバーはたとえば或るツァデーニクにこう語らせている。「真の神への愛は人間への愛から始められるべきです。もしあなたに、神への愛を持つが人間への愛を持たない、とだれかが言うなら、その人はうそつきだと知るべきです」(a.a.O.S.868.)。総じて、教育の領域においてこの点は特に重要である。というのも、問題なのは、いきなり神の現実を問題にするのではなく、まず人間の現実から出発することだからである。「——人格の発展にとって決定的な道は、人間への愛から神への愛に至る道であるとみなされてよいであろう」(a.a.O.S.869.)。
- (31) a.a.O.S.875.
- (32) a.a.O.S.811.
- (33) a.a.O.S.797.
- (34) a.a.O.S.798-799. ちなみに、ここで言われる「火花」は、カバラに由来するハンディズムのひとつの基礎ともなる考え方であり、それによれば、創造の火の奔流が容器に注ぎ込まれたのだが、容器は持ちこたえられずに破壊され、こうして火花が飛び散った。そしてそのそれぞれの火花のまわりには悪なるものとしての殻がまとわりついた。人間がいかにかその火花を救い出すか、この点がいつでも人間にとっての課題となる。いずれにせよ、カバラに連関する問題についてはあらためて問う必要がある。
- (35) a.a.O.S.798.
- (36) M. Buber, Gog und Magog, a.a.O.S.1097.
- (37) M. Buber, Mein Weg zum Chassidismus, S.965.
- (38) a.a.O.S.955.
- (39) a.a.O.S.966.
- (40) M. Buber, Gog und Magog, S.1252.
- (41) a.a.O.S.1205.
- (42) M. Buber, Der Weg des Menschen nach der chassidischen Lehre, a.a.O.S.733.
- (43) M. Buber, Gog und Magog, S.1099.
- (44) M. Buber, Die chassidische Botschaft, S.878.
- (45) 補足すれば、「謙虚さ」についてブーバーは繰り返しモーゼに言及する。たとえば或るラビにこう言わせている。「彼が民のもとに下った時、彼はその高い仕事から離れ、上界から解き放たれ、民に向かいあった。彼は民の小さな心配のすべてを聴き取り、全イスラエルの心の苦勞のすべてを自らに負い、祈りにおいてそれらを高めた」(a.a.O.S.821)。
- (46) M. Buber, Gog und Magog, S.1003.
- (47) M. Buber, Zwei Glaubensweisen, S.736-737.
- (48) M. Buber, Die chassidische Botschaft, S.773-774.
- (49) M. Buber, Der Weg des Menschen nach der chassidischen Lehre, S.716-717.
- (50) M. Buber, Gog und Magog, S.1083.
- (51) a.a.O.S.1083.
- (52) M. Buber, Die chassidische Botschaft, S.826-827.

- (53) a.a.O.S.826.
- (54) M. Buber, Gog und Magog, S.1116–1117.
- (55) a.a.O.S.1180.
- (56) M. Buber, Gog und Magog, S.1026.
- (57) a.a.O.S.1026.
- (58) a.a.O.S.1026.
- (59) M. Buber, Die chassidische Botschaft, S.753.
- (60) a.a.O.S.775.
- (61) M. Buber, Zwei Glaubensweisen, S.770.
- (62) M. Buber, Gog und Magog, S.1189.
- (63) a.a.O.S.1238.
- (64) M. Buber, Gog und Magog, S.1239.
- (65) M. Buber, Der Weg des Menschen nach der chassidischen Lehre, S.719–720.
- (66) M. Buber, Gog und Magog, S.1003–1004.
- (67) a.a.O.S.1078.